

## ウィトゲンシュタインにおける主体の問題

上田 徹

鬼界彰夫先生の退職にあたって、ご専門のウィトゲンシュタインの哲学の内容にできるだけ立ち入った献呈論文集が企画された縁で、わたしも寄稿を求められた。わたし自身は専門の外から短期間で執筆せざるをえず、思わぬ誤解や理解の及ばない点もあるかもしれないがウィトゲンシュタインには昔から関心をもち、論文もいくつか書いているので、鬼界先生の代表作のひとつである『ウィトゲンシュタインはこう考えた』からわたしなりの読解で疑問に考えた点を非礼を顧みず、率直に質問し、ご教示を仰ぎたいと思う。

鬼界先生のご著書は、西洋哲学史のなかでもとりわけドラマに満ちた生涯を送り、そのために現代でも多大な関心を寄せられるウィトゲンシュタインの人生とその内面的な思想の発展を文献学的な精査に基づいて同時に叙述されている点で読み応えのある内容になっていると思われる。ウィトゲンシュタイン自身の哲学の難解さから、かれの人生の問題と不可分であったいわゆる生の問題と哲学の内容そのものを関連づけて論じるのは困難な仕事である。しかし、鬼界先生は、「主体の問題」を前期と後期の哲学を結ぶライトモチーフとすることによって、断絶させることなくウィトゲンシュタイン哲学の展開を提示することに成功された。

どのような興味からウィトゲンシュタインがひとの関心をそそるかは様々であるが、ウィトゲンシュタインの著作はほとんど未整理の遺稿群であり、ほとんどのひとはかれの奇人哲学者としての生涯にまず興味を持つのではないだろうか。専門の哲学の研究者は別として、思想と生涯の軌跡を連動させて理解することはかなり難しいのである。

鬼界先生のご著書はその難関をいわゆる独我論からの魂の救済に焦点をあて、前期でウィトゲンシュタインが苦しんだ宗教的な自我にかかわる倫理的な問題が伏流水のように後期の『哲学探究』といった著作の原動力を生み出したと指摘されている。軽視されがちなウィトゲンシュタインの宗教観とかれ独自の言語哲学との関わりをこの点から解明されたことには、まったく共感させられた。

この献呈論文集はたんなる賛辞だけではなく哲学的な議論まで立ち入った積極的な質問が期待され、疑問点に対しての先生ご自身の応答ともあわせ掲載されるようなので、わたしが疑問に感じた点についてつぎに述べたいと思う。それはもっとも重要であるウィトゲンシュタインにおける主体の問題そのものについてである。以下、文体との兼ね合いから敬称を「氏」に統一させていただくことをはじめにお断りし、お許し願いたい。

鬼界氏はウィトゲンシュタインの主体の問題をかれの生涯にわたる思索のライトモチーフとされ、全部の遺稿群をその観点から結びつけようとしている。その問題は前期では『論理哲学論考』にみられるふたつの主体概念、言語的主体および、形而上学的・倫理的主体の問題から始まり、中期の『哲学探究』での言語使用・適用の観点からの私的言語批判を経て、最晩年での『確実性の問題』での言語主体であると同時に行為主体でもある生の肯定に至る長い道のりである。わたしの疑問はまさにこの点に関わるのであるが、前期ウィトゲンシュタインの主体概念と、後期の主体概念はどのように直結させて理解することが可能であるのか、という点である。

『論考』での主体概念は「わたしの言語の限界がわたしの世界の限界である」(Tractatus, 5.6) というカント的な超越論的な意味をもって導かれる。それは、『論考』の骨格をなす可能な事態の総体としての世界概念である。限界づけるものは論理の網の目である「構造」であり、それは語られず示されるものであるから、われわれは論理の限界を超えたものについては沈黙するしかない。ここから世界の内部には命題の対象となる自我は存在し得ないことになる。「思考し、表象する自我」は対象的に記述できないからである。世界が「わたし」の世界であるという独我論のテーゼが正しいならば逆に自我は主観的なものの一切とともに点にまで縮退して世界からは排除され、独我論と实在論は短絡する。このとき限界として直観されるのは形式の限界であり、内容は捨象されている。世界内の事実や経験は偶然的であるが、言語主体としてのわたしはこの限界そのものであるから、わたしの生と世界はひとつに一致していなければならない。このようにみると、死すべき「わたしの生」に支えられた世界の形式的限界そのものも偶然的ではないかという疑問が残るが、示されることによる限界の外部に語り得ないもの・神秘的なるものを要請することでのみ、わたしの生は有意味に把握される。それらは善悪の意志をもつことのできる形而上学的・倫理的主体としての「わたし」と神である。

だいたいこのように『論考』の主体概念がまとめられるとすると、問題点は一体何がこの世界の限界を確定するのかということであろう。対象と要素命題から論理構造が決定され、これらに事実との接点もあるならば対象や要素命題の具体例が挙げられなければならないが、ウィトゲンシュタインは挙げていない。むしろ命題が適用されることによって論理構造を示し、対象に意味を与えるとみている。鬼界氏はこの点に着眼し、世界外部のグローバルな倫理的主体とともにその派生であるローカルな倫理的主体としての意志がすでに世界の内部に前提されているとみる。この「わたし」は「わたしの言語」と冒頭に言及された「わたし」が姿をあらわしたものであり、現実の状況のなかで「これ」という仕方で名や命題に意味を付与する主体であると解釈する。

しかし、ここで生ずる疑問は、このように言語行為の主体を世界の内部におくことは『論考』における形而上学的主体の概念の超越論的論証を弱めるのではないかということである。形而上学的・倫理的主体は世界に対して善き生、悪しき生を意志しうるだけであるとウィトゲンシュタインは考えていたのではないだろうか。そうでなければ「倫理学は超越論的である」(6.421)という言葉は出てこなかったのではないか。つまり、ウィトゲンシュタインはここでわたしの生と世界全体の存在の意味を問うているのであり、その意味は論理的に外部の可能性をもたず、隣人をもたない限界としての言語主体としての「わたし」からだけでは出て来ないものである。わたしの生に意味を付与するのは形而上学的・倫理的主体としての「わたし」と神であろう。個別的な状況下での言語の使用者としての「わたし」は排除されていると考えるべきではないだろうか。たしかに鬼界氏も、ウィトゲンシュタイン自身が結果的には『論考』のなかからそのようなローカルな言語の使用者としての主体をそぎ落としているとみているが、解釈の強調点は世界内部での言語使用者の意志としての主体がのちの哲学の展開につながるとみている。わたしは『論考』での主体は形而上学的・倫理的主体であれ、限界としての言語主体としてであれ、語られず示されうる次元の主体として個別的な場面での言語の使用者の意志とは区別したほうがよいのではないかと思う。なぜならば、『論考』の美しさをそれは減じる結果になると思うからである。『論考』でのウィトゲンシュタインは、対象は命題のなかで、命題は適用において論理を示すと考えていたが、完結した全体としての論理の構造を考えていたので、事態の成立不成立を一般的な視点からみる方向だったのではないだろうか。それは時空規定をもたない適用の体系であり、個別的場面での適用が意味そのものであるという中期、

後期の立場からは隔たりがあると思われる。

中期以降のウィトゲンシュタインは、私的言語批判をおこないつつ、あらたに「言語ゲーム」の概念をもちいて言語活動の多様性を強調するようになるが、これは言語活動の歴史的安定性を基礎にしており、鬼界氏はそれを「硬化理論」と名付けている。言語活動は、人々が永続した実践のなかで慣れ親しんできたものであり、このように言語を用いていることに正当化の根拠はない。前期において「わたしの言語」という独我論の導入のなかに埋め込まれていた言語主体の実践の立場はこのようにして中期のウィトゲンシュタインの立場に連続するのである。鬼界氏の解釈そのものは言語活動が自然史的事実である点に強調点があるようだが、わたしは同時期に考察されていた数学の哲学におけるウィトゲンシュタインの思考過程もまた重要であると考え。なぜならば、言語活動に正当化の必要がないという主張は、場合によっては相対主義におちいる誤解を生むが、ウィトゲンシュタインの本意はむしろ言語実践と生との内的な結合関係に置かれており、この点において実践そのものが前期の語られずに示される論理形式に結びつけられていると考えるからである。表象や主観的なもの一切を限界としての言語主体から排除した前期の立場は、内的経験の命題の内容を記述することが論理的に不可能であるというレベルからより根本的に遂行される。ウィトゲンシュタインの方法は経験の立場ではなく、あくまでも言語批判であろう。習慣によって硬化したという「制度としての言語」はウィトゲンシュタインが腐心してきた論理形式と言語使用の内的結合という問題点を逆に見えにくくする傾向があるのではないだろうか。このことは、後期の立場において問題とされるウィトゲンシュタインのリアリズムをどのように理解するのかに関連する。誤解を恐れずにいうと、わたしはウィトゲンシュタインの立場は言語活動によって意味は示されるとしている「具体的普遍の立場」であると考えている。わたしは最近「制度としての言語」という中期の言語観は同時に数学に関するウィトゲンシュタインの考察やアスペクト知覚の問題と相補的に理解されなければならないと考え、以前執筆した論文「意味とアスペクト」に加筆修正し、「後期ウィトゲンシュタインの哲学——アスペクト知覚からの解明」としてまとめた(未公開)。中期の「言語ゲーム」や「規則に従うこと」をめぐる問題は数学の哲学と心理学の哲学におけるウィトゲンシュタインの考察によって裏側から支えられなければ哲学的に陳腐な議論のようにみえるからである。

この強調点の違いが鬼界氏の後期ウィトゲンシュタインの理解とわたしの理解との齟齬を生じさせていると思われる。後期の重要テキストである『確実性の問題』の

解釈において鬼界氏は、前期において「わたしの言語」という表現に隠されていたローカルな形而上学的・倫理的主体が言語実践の場に復権したとされる。その根拠となるのは「わたしはここに手があるのを知っている」というムーア命題である。鬼界氏は、この命題のなかの「わたしは知っている」を魂としての自我、この生を生きているわたしについての直接的表現と解釈され、それを「超越言明」と名付ける。しかし、わたしはこの命題にウィトゲンシュタインは同化したのではなく、ムーアのとった方法は懐疑論の反駁としては不十分であると指摘したかったのであると考えている。

「知る」の一般的な用法からみると、ムーアの命題は異常であり、正当化不要の事実を無理に正当化しようとして逆に懐疑論者の罠に陥っているのだとウィトゲンシュタインは批判しているのではないだろうか。これは数学における実在論者と有限主義者の対立と同様に、意味を二分法的な立場からみる誤ったピクチャーなのである。ヒラリー・パトナムは周知のようにここから常識的実在論の立場のヒントを得た。そして、『心・身体・世界——三つの撚り糸』（1999）において、心と身体の関係について実在/反実在の二分法から問う誤りを批判したのである。ムーア命題のような世界像命題は事実と固く結合しており、言語活動が可能になる場を提供するものである点で論理形式と同様の機能をもつ。したがってそれを正当化しようとするのはかえってわれわれの日常的な言語活動の基礎を破壊することになるのである。このようにわたしは理解するが、鬼界氏の解釈では、ウィトゲンシュタインはムーア命題において言語実践の主体としての魂の復権を読みとったとし、前期からウィトゲンシュタインの思索を導いてきた「倫理的主体・宗教的自我」の問題はここに最終的な解決を見いだしたとされる。鬼界氏の解釈はウィトゲンシュタインの生の軌跡を一貫した動機に基づくものと読みとろうとする点で若干性急なのではないだろうか。

わたしは、ウィトゲンシュタインが前期から継続してきた言語実践の主体としての魂の問題の解決は、異なる世界像の並立の可能性をウィトゲンシュタインが認めたことにあると解釈する。それは、「制度としての言語」という言語観とともに、同一の言語主体のうちにおいてもはっきりと経験されるアスペクトの転換の分析を通じてウィトゲンシュタインに開かれた地平であろう。例えば、詩人が用いるような文学的言語と日常的な言語の用法のように、ひとりの主体のうちにも様々な類似性の度合いをもった暗黙の言語のつながりが存在しうる。文藻という言葉があるように人間の情念の彩を表現する言語も日常の平明な状況を報告する言語もひとりの人間のうちに共存しうるのである。ここから類推すれば、「わたし」自身が言語の多様性のなかで

この生を生きている以上、異なる言語主体としての他者がかれの言語のなかで生きていくことは決して理解不可能ではない。前期のウィトゲンシュタインにはなかった他者の復権である。『論考』の言語主体は隣人なき哲学的自我であったが、晩年のウィトゲンシュタインは中期における意味と使用の具体的普遍における内的結合の分析を生かし、このような境位に至ったのではないだろうか。

冒頭に述べたように、前期における形而上学的・倫理的主体としての自我をライトモチーフとして長い思索の過程を経て後期の立場に展開したという鬼界氏の読解自体については、生と言語実践の関係を問いつけたウィトゲンシュタイン哲学の解釈として鬼界氏は斬新な視点を提示されたと思う。しかし、中期・後期のなかで分析の主題となっている言語実践の担い手としての主体をただちに形而上学的・倫理的主体と置き換えると、ウィトゲンシュタインの哲学の根幹である意味と使用という主題の分析が十分に生かし切れない憾みがのこるのではないかと、ということがわたしの率直な疑問である。

寄稿を依頼された際に、わたしの専門であるギリシア哲学との関係にもふれるようにいわれたのであるが、いまはそこまで言及する余裕がない。しかし、プラトニズムの批判者であったウィトゲンシュタインの哲学は、意外にも哲学的対話を根幹に置いたプラトンの哲学とは親和性が大きいのではないだろうか。ロゴスの実践を通じて、意味や真理をプラトンもまた問いつけたからである。さらに、現在講義しているアリストテレスの倫理学におけるプロネーシスの概念や具体的普遍の立場からの現実性の捉え方にも親和性はみられると思う。すでに菅豊彦氏はそのような立場からアリストテレスの倫理学の分析をされている。

以上、鬼界先生のご著書『ウィトゲンシュタインはこう考えた』についてわたしが感じた疑問を率直に述べさせていただいたが、テキストにあたって検討する十分な余裕がなかったので文献学的な精査を踏まえた立場からみれば初歩的な誤解が含まれているかもしれない。その点も含めてご教示いただければ幸いである。また、退職後にはより一層独創的かつ価値ある読解の路線を深められることを祈念し、ご挨拶にかえさせていただきたい。

(うえだ・とおる 筑波大学人文・文化学群非常勤講師)